

## 〈接吻〉語史 キリスト教用語の視点からの再構築

井料, 佐紀子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/10293>

---

出版情報：語文研究. 103, pp.1-16, 2007-06-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 接吻 語史

## キリスト教用語の視点からの再構築

井 料 佐紀子

### 1. 先行研究と本論の目的

#### 1.1. 先行研究

明治期に多く作り出された新漢語の中でも「接吻」は、語学的なアプローチのみならず、随筆などにおいてもその語史についての記述が見られるなど、多くの<sup>(注1)</sup>人々の興味をひいてきた。

主な論考としては、まず広田栄太郎 (1949 ; 1969) 「「接吻」と「くちづけ」」(東京堂『近代訳語考』(1969) 所収) が挙げられ、最近のものでは杉本つとむ (1981) 「訳語の起源を検証」(桜楓社『日本語講座 6』 所収)、同氏 (2003) 「近代訳語を検証する 3 相呂と接吻」(『国文学 解釈と鑑賞』 9月号) が挙げられよう。この二氏によって初めて明らかにされた部分は少なくない。この二氏の論を含む主な先行研究を以下の4点に要約する。

- 1) 中国での「接吻」語形の初出例は、1777年序『西域見聞録』のロシアの風俗をしるした条に見える。後に、白話小説の類において散見される(林若樹 (1926) 「接吻といふ語 斉藤茂吉博士へ」(『江戸生活研究』 創刊号) など)。
- 2) 日本での「接吻」語形の初出例は、『ドゥーフ・ハルマ』(1816年成立) である(杉本 (1981)・広田 (1969))。読みは「ア (ウ) マクチ・ロスイ / クチスウ・クチラスウ」(杉本 (2003))。
- 3) 『波留麻和解』(1795年刊) に、「kùs」に「握手、<sup>くちすい</sup>吸口ノ礼」という訳語が見られることなどから、性愛表現ではない <sup>(注3)</sup>接吻 も把握されていた。
- 4) 「接吻」を「くちづけ」と読ませたのは、明治9 21 (1876 1888) 年刊『旧・新約全書』が最初である(広田 (1969))。「接吻」を「セップン」と読ませた初出の確例は、『和訳英辞書』(1869年刊) (杉本 (2003))。

#### 1.2. 本論の目的

ドゥーフ・ハルマが中国語語彙から借用した語形が日本での「接吻」初出例

であり、その後の外国語辞書類（『英和对訳袖珍辞書』<sup>(注4)</sup>（1862）など）につながっていることは、現在では疑いのない事実である。そして本論はそれを否定するものではない。

ただ、先行研究には、キリスト教用語あるいは宗教用語としての 接吻 という視点が欠けていると言わざるを得ない。なぜその視点が必要なのか。

1872（明治5）年9月20日、横浜の J. C. ヘボン（J. C. Hepburn）宅でプロテスタント各派合同の宣教師会議が開催され、1874（明治7）年3月に設立された翻訳委員社中の名の下で聖書和訳業が進められた（以下「翻訳委員会訳」）。

時系列で見ると、確かに「接吻」を採用した翻訳委員会訳はドーフ・ハルマよりかなり時代が下るし、翻訳事業以前に刊行され、「接吻」を採用している外国語辞書もいくつもある。<sup>(注5)</sup>

しかし、この聖書には文体・用語ともに漢訳聖書の影響が非常に大きく、翻訳委員会の席上にあった漢訳聖書の 接吻 訳語は「接吻」であった。ヘボンの訳語採用に影響を及ぼしたのは、決してオランダ語系外国語辞書類（あるいはその影響下にあるもの）だけではないと考えるのが妥当であろう。

例えば、林（1926）では、1868年版の漢訳聖書（後述の BC 訳）と、和蘭字彙（1855）、英和对訳袖珍辞書（1862）の時系列を問題にして、「（斎藤茂吉が）「この漢訳から思ひ付いて邦訳が「接吻」としたかもしれぬ」云々と記されたのは考が逆であることは、以上引くところの辞書や聖書で明らかであらう<sup>(注6)</sup>」とする。時系列のみで語史を構築すると、「考が逆」ということばで漢訳と和訳聖書の密接な関係を見落としてしまい、キリスト教用語（宗教用語）としての 接吻 の性格を無視した論となってしまう。

その点を明らかにすることが本論の目的である。そのために、幕末・明治期以前の語史も再構築し、接吻 語史を「キリスト教用語（宗教用語）」という統一した視点から検証する。

## 2. 本 論

### 2.1. 接吻 の定義

本論の目的は、キリスト教用語の視点からの 接吻 語史の再構築である。そのため、まず前提としてキリスト教での宗教的な意味における 接吻<sup>(注7)</sup> を以下の3点に定義する。

- (1)「親愛」 - 友愛・親愛をあらわす

(2)「挨拶」 - 客人の歓迎・挨拶をあらわす

(3)「恭順」 - イエスあるいは聖なるものに対する恭順・服従をあらわす  
特に、足への接吻は絶対的な服従をあらわす (最も宗教的な  
行為)

ただし、ヘブライ語聖書・ギリシア語聖書<sup>(注8)</sup>・ラテン語聖書 (ウルガタ (405))・  
英訳聖書 (KJV (1611)) において、いずれもこの三つの定義に並行する訳し  
分けは見られない。

また、一般的意味として、

(4)「性愛」 - 性的な愛情をあらわす  
も付け加えておきたい。

### 2.1.1. 和文資料

ヘボンの『和英語林集成』(第三版、1886)「和英の部」で、接吻 に関する  
見出し語は「クチスフ」「クチツケ」「セツブン」である。その中の「クチス  
フ」は、早くからあらわれた語形である。

久ク葬送スル事无クシテ、抱テ臥シタリケルニ、日来経ルニ、口ヲ吸ケルニ、  
女ノ口ヨリ奇異キ臭キ香ノ出来タリケルニ

(『今昔物語』(1120頃成立) 卷十九・第二)

「口(を)吸う」「口吸ひ」(以下「クチスイ系」)は、近世期の噺本・好色物  
などにもあらわれる表現であり、いずれも定義(4)「性愛」の場面で用いら  
れている。このクチスイ系は、いわば日本固有の 接吻 をあらわす語形と言  
える。

さぐらせ。口すはせ。ばゝにだきつき。よめのくちすひ、

(『好色訓蒙図彙』貞享3(1686)年刊)

二階にたゝ二人、(中略) 口吸ふたり、ちわするを、ながめつめいる所を、  
子供どもが見て、

(『夕涼新話集』安永5(1776)年刊)

### 2.1.2. キリシタン資料

キリシタン資料では、定義(4)「性愛」の 接吻 は固有のクチスイ系が採  
用されている。

その五体に手を掛け、口を吸ひ、抱き (cuchi vo sui ǐdaqi)、恥を探ること<sup>(注9)</sup>  
等は思ふままにしまらす。(『コリヤードさんげろく』1632刊)

ラポ日対訳辞書 (1595刊) では、ラテン語 basio, osculor, deosculor の三語が 接吻 に関連する語として採用されている。

Basio Fito nadouo sũ. (人などを吸ふ)

Osculor Cauo nadouo sũ. (顔などを吸ふ)

Deosculor Te nadouo sũ. (手などを吸ふ)

このうち osculor, deosculor はウルガタ聖書にあらわれるが、basio はあらわれない。いずれも「吸ふ」という表現で、固有のクチスイ系を採用しているようにも思われるが、「人などを」「顔などを」「手などを」のように対象語に違いが見られる。この理由については後述する。

ポルトガル人マノエル・バレット (Barreto, Manoel) による、ウルガタ聖書からの日本語訳聖書跋渉句集である「バレット写本」<sup>(注10)</sup> (1591) にあらわれる 接吻 は以下の4例である。

謀叛人のユダかねての約束には、我御顔を吸ひ奉るべきに (von cavo vo sui tatemaccuru bequini)、人体を搦め取て油断なく召し籠められよと云ひ捨て、  
「マルコ福音書」14 44

さればジュダス近付き奉て、アベ・ラビと申し上げ御顔吸ひ奉るに (von cavo sui tatemaccuruni)、「如何に親しき仲、何の故にか来たられけるぞ。吸ふ事を相図にしてビルゼンの子渡されけるや？」と宣ふ。

「マルコ福音書」14 45

ゼズスの御跡より感涙をもって御足を潤ほし、鬢髪をもって拭ひ、口をもつて吸ひ (cuchivo motte suý)、件の薬をもって塗り奉られけり。

「ルカ福音書」<sup>(注11)</sup> 7 38

この女房は座中に入りてよりこのかた足を吸ふ事 (axivo su coto)、間隙なし。  
「ルカ福音書」7 45

バレット写本の4例は、いずれもイエスに対する恭順 (マルコは偽りの恭順)

をあらわす定義 (3) の 接吻 である。2.1. で前述したとおり、足への接吻 は絶対的な服従をあらわし、最も宗教的な行為である。

また、他のキリシタン資料の定義 (3) の 接吻 もバレット写本と同様である。

あまたの人善人の御こついげをおがむために所々をまはり (中略) きんしやのたくひにてつゝまれたるべあとの御こついげをすひいたゞき奉るに、

(『<sup>(注12)</sup>こんでむつすむん地』(1610刊) 国字本 巻第四)

余りのご大切に燃え立ちてご威光をも憚らず、ただ御足許に倒れ伏し、御足を吸ひ奉らんと (von axiuo sui tatematçuranto) せられし也。

(『<sup>(注13)</sup>ロザイロの観念』1622刊)

いずれの例もラポ日対訳辞書と同じく「足」「御顔」「べあとの御こついげ (聖人の遺骨)」という対象語を伴っており、<sup>(注14)</sup>クチスイ系を直接用いてはいない。その理由は、いずれの行為もいわゆるマウス・トゥ・マウスの 接吻 ではないために「口 (を) 吸う」を使えなかった、という解釈も当然考えられよう。

しかしながら、ラポ日対訳辞書の記述を考え合わせると異なった見方もできる。ウルガタ聖書では、上記4例の 接吻 はいずれも oscular である (deoscular は他の箇所にあられる<sup>(注15)</sup>)。聖書にあられない basio が、おそらく性愛的なニュアンスも伴ったラテン語だということを考えると、<sup>(注16)</sup>「顔/手」「人」と対象語を変えて、oscular / deosular と basio との間になんらかの違いを持たせようとしているという意図も窺える。

よって本論では、キリシタン資料では、定義 (4) 「性愛」の 接吻 は固有のクチスイ系をそのまま用いているが、定義 (3) 「恭順」の 接吻 は固有のクチスイ系を参照しながらも直接は用いず、「顔」「手」「足」のように対象語を変えて、定義 (3) と (4) の間に違いを持たせようとしていた、と結論づけたい。

### 2.1.3. 仏教資料・訓点資料

キリシタン資料以外に定義 (3) 「恭順」の 接吻 (あるいはそれに準ずる行為) があられるのは、管見の限りでは仏教資料・訓点資料である。

其の時上人ノ、手ヲネブラセ給ケルガ、一期ノ間、香カリケルコトゾ。

(『沙石集』卷一・五)<sup>(注17)</sup>

跪 [ひさまついで] テ [而] 徳ヲ讃スル 之ヲ盡敬ト謂フ (中略) 近シテハ [ときは] (則) 足ヲ舐 [ねふり] リ踵 [クヒス] ヲ摩スル (舐足摩踵)

(『大唐西域記』卷第二 承元四 (1210) 年頃点)<sup>(注18)</sup>

始安郡ノ都督上黨ノ公馮古璞等、城ノ外ニ歩出テ、五体ヲ地ニ投テ、足ヲ接テ [取也] (而) 礼ス (五体投地、接足而礼)

(『唐大和上東征伝』院政期点)<sup>(注19)</sup>

始安ノ都督上黨ノ公、馮古璞等、歩ヨリ城外ニ出テ、五体ヲ地ニ投ゲ、足ヲ接シテ (而) 礼ス (五体投地、接足而礼)

(『唐大和上東征伝』宝曆十二 (1762) 年版本)

『唐大和上東征伝』の 接吻 (あるいはそれに準ずる行為)<sup>(注20)</sup> は、院政期点本と『類聚名義抄』に「接 トル」とあることから「足ヲ接ル」と読んでおく。

いずれも恭順をあらわす行為だが、固有のクチスイ系あるいはそれにつながる語ではなく、「手 (足) ヲ舐<sup>ネブ</sup>ル」「足ヲ接<sup>ト</sup>ル」という表現を用いている。その点では、固有のクチスイ系を参照したキリシタン資料とは一線を画しているといえよう。

### 3. 聖書翻訳事業での 接吻

#### 3.1. 漢訳聖書

翻訳委員会訳の源流に漢訳聖書があることは、現在では周知の事実である。<sup>(注21)</sup> その漢訳聖書を、カトリック布教時代・プロテスタント布教時代と時代を追って見ていく。

##### 3.1.1. カトリック布教時代

パリ外国宣教会 (Société des Missions Étrangères de Paris) 所属の宣教師 J. バセー (J. Basset, 1662 1707) による「四史攷編」(以下「バセー訳」とよばれる写本 (四福音書の跋涉)<sup>(注22)</sup>) がある。

バセー訳の 接吻 があらわれる章を以下すべて挙げる。

付之者與衆定号曰我所親者就是汝曹捉之其郎就耶蘇曰申師福且親之

(マタ26・48 49)

立止厥足後始淚濯厥足用己頭髮拭以口親之<sub>之</sub>以香液<sub>之</sub>伝之 (ルカ7・38)  
 尔未親余其自入親我足 (ルカ7・45)  
 一遂起往見其父離屋猶遠其父見之動側怛跑抱厥頸親<sub>之</sub> (ルカ15・20)  
 同彼衆祈禱衆乃大哭作遂倒保祿頸上親<sub>之</sub> (使徒行伝20・37)

このバセー訳は、中国で伝道した最初のプロテスタント宣教師であるモリソン (Morrison, R.) の聖書漢訳に大きな影響を与えており、バセー訳の接吻 訳語である「親」も、モリソンに引き継がれている。

### 3.1.2. プロテスタント布教時代

モリソンはミルン (Milne, W.) の協力を得て、1814-1824年に新約・旧約の漢訳聖書を完成させた (以下「MM 訳」)。MM 訳では「親嘴」「嘴」「覷」「嘴親」 (以下「親嘴系」<sup>(注23)</sup>) が 接吻 訳語として採用されている。

且付之者給伊等号曰、我所將親嘴即是他、爾等捉之。且其即到耶蘇曰、主也、請安。而親嘴他。 (マタ26・48-49)

而立其脚後哭、始以淚洗厥脚、以其頭髮拭之。又親嘴厥脚。及伝其油。 (ルカ7・38)

嘴親爾不給、乃彼自進來、不息嘴我脚。 (ルカ7・45)

恤憐之、跑走向之落其頸上、親嘴之。 (ルカ15・20)

衆乃大哭作、遂倒保羅頸上覷之。 (使徒行伝20・37)

時厥父以撒革謂之曰、我子近来親嘴。 (創27・26)

故摩西出迎厥岳父、而行礼親嘴他、且伊等相問安而進來帳内。 (出エジプト18・7)

モリソンは、自らの手になる英華辞典 (1820) においても親嘴系の訳語を採用しており (「Kiss 親嘴、啜乖、対嘴」)、他の英華辞典も同様に親嘴系の語を採用している (メドハースト英漢辞典 (1847-48) 「To kiss, 親嘴、啜乖、対嘴、親口」、ロブシャイド英華字典 (1866-69) 「Kiss 親嘴、啜 / Buss, a kiss, 親嘴、啜嘴」)。

この英華辞典 (特にロブシャイドの字典) を大いに参考にした中村正直は、翻訳物の中でこの親嘴系の語を用いている。



物斯的八、吾ガ母ノ一親嘴<sup>エキス</sup> [クチヲホウニツケルコト] ヲシテ画工トナラシ  
メタリト云ヘリ (『改正西国立志編』(明治10(1877)版))

1843年、英米各宣教師会の代表たちの共同作業による新たな聖書改訳が企画され、1852年に新約聖書が完成した。しかし、この過程でいわゆるターム・クエスション(用語問題)<sup>(注24)</sup>が起こり、英国系委員と米国系委員が分裂し、英国系委員は1852-1854年に新・旧約聖書を刊行(以下「代表訳」)し、米国系委員はブリッジマン(Bridgeman, E. C.)とカルバートソン(Culbartson, M. S.)を中心にして1859-1862年に新・旧約聖書を刊行した(以下「BC訳」)。

### 【代表訳】

売師者遞以号曰、我接吻者是也、可執之。耶蘇曰、夫子安。遂與接吻。  
(マタ26・48 49)

言時、衆至十二門徒之一猶大、趨就耶蘇、接吻之。耶蘇曰、猶大、爾以接吻  
売人子乎。(ルカ22・47 48)

於是反就父曰、相去尚遠、父見憫之、趨抱其頸接吻焉。(ルカ15・20)

### 【BC訳】

売之者、曾給以号曰、我接吻者、即彼也、爾可執之。(マタ26・48)

立耶蘇足後而哭、以淚濡其足、以首髮拭之、且吻其足、以香膏膏之、  
(ルカ7・38)

爾未嘗吻我、惟此婦自我入時、吻我足不已、(ルカ7・45)

於是、起而歸父、相去尚遠、父見之、乃憫之焉、趨前、抱其頸而接吻。  
(ルカ15・20)

衆大哭俯保羅頸上、而吻之。(使徒行伝20・37)

代表訳・BC訳は、聖書日本語訳作業にとりくむ翻訳委員たち(特に日本人補佐たち)の席上にあり、翻訳委員会訳に文体・用字ともに大きな影響を与えている。この二つの漢訳聖書では 接吻 訳語には「吻」「接吻」「吻」「接吻」(以下「接吻系」)<sup>(注25)</sup>が用いられている。

代表委員会開催後の漢訳聖書が親嘴系から接吻系へと訳語を転換させたことが、翻訳委員会訳の訳語採用に大いに影響を与えたことは明らかであろう。

## 3.2. 和訳聖書

### 3.2.1. 個人訳聖書

キリシタン時代以来最初の和訳聖書は、1837年、ギュツラフ (K. Gützlaff) によって、シンガポールの堅夏書院から刊行された『<sup>ヨハネ</sup>約翰福音之伝』である。

その後、ユダヤ系ハンガリー人ベッテルハイム (B. J. Bettelheim) によるルカ・ヨハネ福音書、使徒行伝、ローマ人への手紙が1851年香港で刊行された(以下「ベッテルハイム訳」)。

糸その うしろに たちて しかうして なく なミだ その あしを ぬ  
らし かしらのかミを もつて これを のごふ そのあしを くちすひて  
かう やくを もつて これを あぶらす。 (ルカ7・38)

こゝに おいて おき たちて ちゝに かへる。あひ はなれること な  
ほ とをきに ちゝ 見て これを あはれむ。わしりて その くびを  
いだきて くちを すふ。 (ルカ15・20)

ベッテルハイム訳にあらわれる 接吻 はすべて、固有のクチスイ系である。また、ギュツラフ訳はヨハネ福音書のみであるため 接吻 はあらわれないが、ギュツラフ訳が参考にしたメドハースト「英和英語彙集」(1830)では「クチラスウ To kiss」のように、こちらもクチスイ系を採用している。

個人訳で最初に接吻系の訳語を採用したのは、ヘボンと S. R. ブラウン (S. R. Brown) (いずれも翻訳委員会の中心人物であった) による『<sup>マルコ</sup>馬可伝』、『<sup>ヨハネ</sup>約翰伝』(1872)、『<sup>マタイ</sup>馬太伝』(1873) (以下「ヘボン=ブラウン訳」)である。ヘボン=ブラウン訳はBC訳の書き下し文をもとにしており、接吻 訳語もBC訳と同様に接吻系が採用されている。ただし、読みは翻訳委員会訳(「くちつけ」)とは異なり「キツス」である。

耶蘇をわたすものかれらにあいづをしめしてわが<sup>キツス</sup>接吻せんものこそそれなれ  
これをとらへよといへり たゞちに耶蘇にきたりてラビやすきやといひてか  
れに<sup>キツス</sup>接吻せり (マタ・26 48, 49)

翻訳委員会の中心人物である二人の個人訳聖書は、聖書和訳史上一大事業である翻訳委員会訳へとうけつがれてゆく。

### 3.2.2. 翻訳委員会訳

翻訳委員会訳では、BC 訳・代表訳と同様にほぼすべて接吻系の訳語を採用している（漢訳聖書とは違い「吻接」などは用いず、「接吻」のみ）。ヘボン＝ブラウン訳とは違い、読みはすべて「くちつけ」である。その一部を以下に挙げる。

イエスを売す者かれらに号をなして曰ける八我が接吻する者（我接吻者）  
夫なり之を執へよ 直にイエスに來りラビ安かと曰て彼に接吻す（吻接之）

（マタ26・48 49）

即ち起て其父に往り尚とほく在しに其父かれを見て憫ミ趨往て其頸を抱て  
接吻しぬ（抱其頸而接吻）

（ルカ15・20）

彼等ミな大に哭きパウロの頸を抱て之と接吻し（而吻接之）其再び我面を見  
まじといひし言に因て別ても憂をなし彼を舟まで伴へり（使徒行伝20・37）

「ほぼすべて」が接吻系（「接吻」）を採用していると言うのは、例外が7例見られるためである。その7例には共通点があり、それは、例外が全て定義(3)「恭順」の接吻であるという点である。この7例は「接吻」ではなく「口接」「口を接る」「くちつけ（す）」（以下「口接系」と表記されている。

イエスの後にたち足下に哭き涙にて其足を濡し首の髪をもて之を拭かつ其足  
に口を接また香膏を之に抹り（且吻接其足、以香膏膏之）

（ルカ7・38）

爾八我に口を接ず（爾未嘗吻接我）此婦八我こゝに入し時より我足に口を接  
て已ず（吻我足不已）

（ルカ7・45）

サムエルすなわち膏の瓶をとりてサウルの頭に沃ぎ口接していひける八（且  
吻接之、曰）エホバ汝をたてゝ其産業の長となしたまふにあらざや

（サム上10・1）

心竊にまよひて手を口に接しことあるか（我口吻接於我乎）。

（ヨブ31・27）

又我イスラエルの中に七千人を遣さん皆其膝をバアルに跑めず其口を之に接  
（ママ）ざる者なり（亦未嘗接吻於彼者也）

（列王上19・18）

子にくちつけせよ（吻接其子兮）、おそらく八かれ怒をはなち、なんぢら途  
にほろびん、

（詩篇2・12）

この口接系の表記は漢訳聖書（BC 訳）にはあらわれない形であり、また

リシア語・ラテン語・KJV の該当部分における有意な訳し分けは見られない。<sup>(注32)</sup>  
ここでヘボン自身が編集した『聖書辞典』(1925、ヘボン・山本秀煌編)の接吻に関する記述を挙げる。

クチツケ (接吻) むかしハへブルの国に行はれ今も猶西洋諸国に行ハるゝ一の  
礼儀にして愛するもの、又親しき者の額、又は頬若くハ口にくちをつけること  
なり是則ち彼国の習慣にして愛のしるしなり又敬ふべき者を敬ひ (路七ノ四十  
五) 王たるもの、師たるもの、主たる者に帰服するのしるしなり又親しき者の  
中に於て挨拶のしるしなりイスカリオテのユダは其悪心をかくし主イエスを愛  
するがごとく装ひ接吻を以て主を其敵に解せり (太廿六ノ四十八、四十九)

ヘボンは「くちつけ」を「彼国の習慣にして愛のしるし」(定義 (1))、「敬ふ  
べき者を敬ひ、王たるもの、師たるもの、主たる者に帰服するのしるし」(定  
義 (3))、「親しき者の中に於て挨拶のしるし」(定義 (2))と定義している。  
ヘボンが「敬ふべき者を敬ひ、王たるもの、師たるもの、主たる者に帰服する  
のしるし」の例として挙げるルカ7・45は7例のうちのひとつである。この口  
接系の訳語は、和英語林集成にはあらわれない形であり、ヘボンは聖書でのみ  
この語形を採用したと思われる。

聖書にあらわれる定義 (3)「恭順」の接吻を口接系、その他の接吻  
(定義 (4)「性愛」も含むか)<sup>(注33)</sup>は接吻系と訳し分けていることは、ヘボンが  
接吻をキリスト教用語として重要なものと認識しているからに他ならない  
し、またその訳出にも精緻な注意を払っていたことの証左であろう。そして、  
定義 (3)「恭順」の接吻をもっとも注意すべき宗教的な概念と認識してい  
たのだと考えられる。

### 3.3. 和英語林集成

和英語林集成の初版 (1867)「英和の部」では、“No equivalent for this  
word in the Japanese. (日本語にはこの語 (kiss) に相当するものがない)”  
としているが、再版 (1872)、第三版 (1886) では「クチスイ」「セツブン」  
「クチツケ」と新たな語を採用している (再版で和英の部の見出し語に「クチ  
スイ」を、再版ではそれに「セツブン」<sup>(注34)</sup>「クチツケ」を付け加えている)。

ヘボンは、聖書翻訳事業を通して「セツブン」「クチツケ」という新語を採  
用しながら、固有の語形「クチスイ」<sup>(注35)</sup>も変わらず採用している。

### 3.4. 翻訳委員会訳以後の 接吻

翻訳委員会訳前後（特に明治二十年以後）の 接吻 語史については、広田（1969）に詳しい。以下2点に要約する。

- 1) 明治初期から十年代にかけての随筆・翻訳小説では、「接吻」以外にも「吸唇<sup>キウシン</sup>」「口吻<sup>こうふん</sup>」「吻札<sup>ふんれい</sup>」「親嘴（クチラスフ・キツス）」など、さまざまな語が用いられており、固有の「口を吸ふ」（性愛表現の場合は特に）という表現も用いられていたが、明治二十年代に進むと、翻訳物だけではなく、創作物にも「接吻」「くちづけ」の語が現れ、「キツス」という語と並び行われた。「くちづけ」と連濁につづったのは上田敏が最初であり、明治三十年代に至ってからである。
- 2) 「接吻」という語を読者に印象づけたのは森鷗外と二葉亭四迷の作品である。また、「あひゞき」「片恋<sup>(注36)</sup>」といった翻訳作品において二葉亭四迷は性愛表現にも「接吻」を用いている。

すなわち明治二十年代に至って、「接吻」は「セツブン」と読まれて文学作品などにも登場することとなり、定義(4)「性愛」の 接吻 であるクチスイ系の語をも淘汰してゆくことになる。明治三十年代には、上田敏の手によって「くちづけ」も多く用いられるようになる<sup>(注37)</sup>。

## 4. 結 論

「性愛」の 接吻 には、元来「口（を）吸う」「口吸ひ」といったクチスイ系の表現が用いられ、それは明治期にいたるまで変わることはなかった。またキリシタン資料においても「性愛」の 接吻 はクチスイ系であった。クチスイ系は日本固有の 接吻 語といえよう。

また、聖書に多くあらわれる「恭順」の 接吻 （あるいはそれに準ずる行為）は、当然ながらキリシタン資料に多く用いられるが、仏教資料・訓点資料にも散見される。しかしながら、仏教資料・訓点資料では「手（足）ヲ舐<sup>ネブ</sup>ル」「足ヲ接<sup>ト</sup>ル」といった固有のクチスイ系とは全く違う語形が用いられているのに対し、キリシタン資料においては、固有のクチスイ系を参照した「顔・手・足を吸ふ」といった語が用いられるという点に違いが見られる。

明治期、翻訳委員会訳聖書では漢訳聖書の接吻系の語をうけつぎ、ほぼ全ての 接吻 が接吻系で訳出され「くちづけ」と読まれた。しかしながら翻訳委

員会訳では「恭順」の 接吻 は、他とは異なり「<sup>くちつけ</sup>口接」「<sup>くちつけ</sup>口を接る」「くちつけ(す)」といった口接系の語を採用している(ヘボンはこの語形を和英語林集成では採用していない)。この訳し分けは、ヘボンが如何に 接吻 を宗教用語として重要視していたかをあらわすものである。

「接吻」という語形はオランダ語系辞書の影響も相俟って広く行われるようになり、明治二十年代に至っては翻訳作品以外にも用いられる。この語形は「性愛」の 接吻 にも用いられ、固有のクチスイ系の語をも淘汰してゆく。

以上のように、本論ではキリスト教用語(宗教用語)としての視点から 接吻 語史の再構築を試みた。接吻 語史において重要なのは、オランダ語系外国語辞書による流入経路だけではなく、聖書の翻訳を媒体とした流入経路も同時に重要であったことを検証したつもりである。本論を複眼的な翻訳語史構築へのひとつの提案としたい。

#### [参考文献]

- 海老沢有道(1981)『新訂増補版 日本の聖書 聖書和訳の歴史』(日本基督教団出版局)  
川島第二郎(1993)『初期の日本語聖書と中国語聖書』(『月刊しにか』11月号)  
佐藤 亨(1986)『幕末・明治初期語彙の研究』(桜楓社)  
鈴木 広光(1995)『漢訳聖書における pneuma の翻訳について』(『キリスト教史学』49)  
鈴木 広光(2005)『神の翻訳史』(『国語国文』74 2)  
永嶋 大典(1999)『聖書邦訳史略述』(ゆまに書房『幕末邦訳聖書集成』別冊)  
望月 洋子(1982)『ヘボンの生涯と日本語』(新潮選書)  
矢沢 利彦(1972)『中国とキリスト教』(世界史研究双書12 近藤出版社)

#### 注

- (注1) 齊藤茂吉による随筆「接吻」(1925)において、漢訳聖書との関連で語史が語られている。  
(注2) 初出例に関しては、杉本(2003)において「多分、わたくしが昭和三十八(1963)年に社会思想社から刊行した日常語の語源辞典、『現代語』で一般公開したのがオランダ語との関連での 接吻 紹介のはじめであろう。(p.226)」と述べられている。  
(注3) 本論では <sup>クレスフ</sup> の 接吻 を「概念としての接吻」と定義する。  
(注4) 「Kiss 接吻 / Kiss 接吻スル / Buss 接吻」。  
(注5) 『和蘭字彙』(1855)「kùs 接吻 / kùsjen 接吻スル」、英和对訳袖珍辞書のいわゆる海賊版である『和訳英辞書』(薩摩辞書)(1869)「kiss 接吻 / buss 接吻」など。  
(注6) 林(1926) p.23.  
(注7) ヘブライ語・ギリシア語・ラテン語では、それぞれ

ヘブライ語	n <sup>e</sup> shîqāh / nāshaq / piel
ギリシア語	φίλημα (phīlēma)・φιλέω (phīlēō) - 愛する、かわいがる；接吻する καταφιλέω (kataphīlēō) - 心をこめて接吻する；愛撫する
ラテン語	osculator (osculum) - 接吻する；愛撫する deosculator (deosculum) - 愛情こめて接吻する；称賛する

となる。

- (注8) ヘブライ語・ギリシア語該当箇所については、『旧約新約聖書大事典』(1989)・『聖書語句大事典』(1969)を参照。
- (注9) 小島幸枝(1989)『キリシタン版『スピリツアル修行』の研究』資料篇(上)による。
- (注10) ヴァチカン図書館蔵写本 Reg.Lat.459. 用例の翻字は『キリシタン研究 第七輯』(山田俊雄)による。
- (注11) ウルガタ聖書は“et stans retro secus pedes eius lacrimis coepit rigare pedes eius et capillis capitis sui tergebat et osculabatur pedes eius et unguento unguebat”. パレト写本の該当部分は直訳ではなく、ラテン語の“pedes eius”(イエスの足に)の繰り返しを、「~をもって」の繰り返しに移しかえていると思われる。「口をもって吸ひ」はそのひとつとして位置づけるべきであろう。
- (注12) 日本古典全書『吉利支丹文学集 上』による。
- (注13) 小島幸枝(1989)『キリシタン版『スピリツアル修行』の研究』資料篇(上)による。
- (注14) ルカ7 38の「口をもって吸ひ」に関しては脚注11参照。
- (注15) サムエル記上10 1「サムエルは油の壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ、彼に口づけて、言った。「主があなたに油を注ぎ、御自分の嗣業の民の指導者とされたのです。」(tulit autem Samuhel lenticulam olei et effudit super caput eius et deosculatus eum ait ecce unxit te Dominus super hereditatem suam in principem.)など。日本語文は新共同訳による。
- (注16) 現行の羅日辞書では「basio(情愛こめて)接吻する」。脚注7も参照。
- (注17) 日本古典文学大系85『沙石集』による。明恵上人が天竺行きを前にして春日大明神に参詣し、託宣を受けたあとに大明神の手に口をつける場面であり、有名な「鹿の膝折説話」の一部分である。ただし、引用箇所の「其ノ時~コトゾ」の部分は、古本系にのみ付け加えられている。
- (注18) 「東方学デジタル図書館」<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/top.html> 京都大学松本文庫蔵本による。
- (注19) 古典保存会影印本(橋本進吉解説)による。
- (注20) この行為は、梵語 pādaū śirasā vandati「両手を伸べて対者の足を承け、自己の頭面を其の足に接し、以て致礼を表する作法」(『望月仏教大辞典』)の漢訳「接足作礼」のこと。
- (注21) 土岐健治(1993)『邦訳聖書の源流としての漢訳聖書』(『月刊しにか』9月号、大修館書店)など。
- (注22) パセー訳の原典(ウルガタ聖書)も、訳出の正確な時期と場所も現時点では不明である(土岐(1993)による)。現存するものは大英博物館にある一写本のみ。

本稿では日本聖書協会図書館蔵のコピーを参照した。

- (注23) 「親嘴」24例、「嘴」1例、「覘」3例、「嘴親」2例と「親嘴」がもっとも多い。
- (注24) 英国系委員は theos=「上帝」/pneuma=「神」を主張、米国系委員は theos=「神」/pneuma=「霊」を主張して対立した。
- (注25) 井深樞之助の談話「そのテーブルの上を開てある書物はブラオン氏とグリーン氏の前には二三種の希臘原文の聖書、ヘボン氏の前には英訳の新約註解書、日本人の前には文理や官話やその他の支那翻訳の聖書といふ風であつた様に記憶する」(「福音新報」1088号(1915)「新約聖書の日本訳に就て」)。
- (注26) BC訳での「接吻」/「吻接」「吻」は、「而接吻」「我接吻者」/「吻接之」「吻我」のように、語法的な差異によるものであろう。
- (注27) 先行研究に指摘されているとおり「くちつけ」の初出である。
- (注28) ( ) 内はBC訳。
- (注29) 『聖書象徴事典』(1988、マンフレート・ルルカー著 池田紘一訳、人文書院)に「口づけは尊敬と崇拜のしるしである。サムエルがサウルに口づけするのは、これによって新たに選ばれた王に恭順の意を表したのである(サムエル上10, 1)。偶像礼拝の際には、バアルの前に跪き、その立像に口づけした。両足に口づけすることは、無条件の服従を意味する。「畏れ敬って主に仕え、慄きつつその足に口づけせよ」(詩篇2, 11 12)。」とある。いずれも例外7例が含まれている。
- (注30) この表記が何によるものかは明らかにし得ないが、外国語辞書の中では村上英俊編『仏語明要』(1864)に「baiser 口接ス/baiser 口接」がある。
- (注31) 「手にくちづけする」ではなく、投げキスの意。
- (注32) 例えば、ルカ7・45の前者はギリシア原典は philēma、後者は kataphilēō であるが、翻訳委員会訳では両者とも口接系を採用している。KJV ではないずれも kiss であり、新約・旧約を通してすべて kiss を採用している。
- (注33) 『旧約新約 聖書大事典』では、創世記29・11「而してヤコブラケルに接吻し声をあげて啼哭ぬ(雅各吻接拉結挙声啼哭)」、箴言7・13「この婦かれをひきて接吻し恥しらぬ面をもていひけるハ(遂携少者吻接之面無廉恥而謂之曰)」などは定義(4)「性愛」の接吻 であるとする。翻訳委員会訳・BC訳いずれも接吻系を採用し、定義(1)(2)との訳し分けは見られない。「 」内は翻訳委員会訳、( ) 内はBC訳。
- (注34) 再版「Kiss, t.v. Kuchisū, seppun suru. / KUCHI-SUI, -su, -ita, クチスフ、接吻、t.v. To kiss. Kuchi-suite aisatsu wo suru, to salute by kissing.」、第三版「Kiss, t.v. Kuchisū, seppun suru, kuchi-tsuke suru. / KUCHISUI, -su クチスフ 接吻 i.v. To kiss : kuchisuite aisatsu wo suru, to salute by kissing. / KUCHITSUKE クチツケ 接吻 n. kiss : -suru. To kiss. / SEPPUN セツプン 接吻 n. A kiss : -suru. To kiss.」
- (注35) 接吻系の訳語採用には、オランダ語系の辞書の影響も考慮すべきであることは否定しない。
- (注36) 例を挙げると「アーシャはガギンの領(えり)に手を掛けて、嚙上げて泣きながら、接吻(せつぶん)して、犇(ひし)とばかりに抱きついた」(『片恋』(明治29(1896)年))
- (注37) 元来、「くちつけ」とは「口癖」を意味していた(「くちつけ クチヅクルコト。言ヒ馴ラスコト。口癖(クチグセ)。」『大言海』(1932))。「口癖」の意味での



「くちづけ」の衰退と、「くちつけ」の濁音化が関連している可能性もある。

[付記]

本稿を成すにあたっては、平成18年度第206回筑紫国語学談話会（現 筑紫日本語研究会）、平成18年度九州大学国語国文学会の席上で多くの貴重なご意見を賜った。深く御礼申し上げます。

(いりょう さきこ・本学大学院博士後期課程)